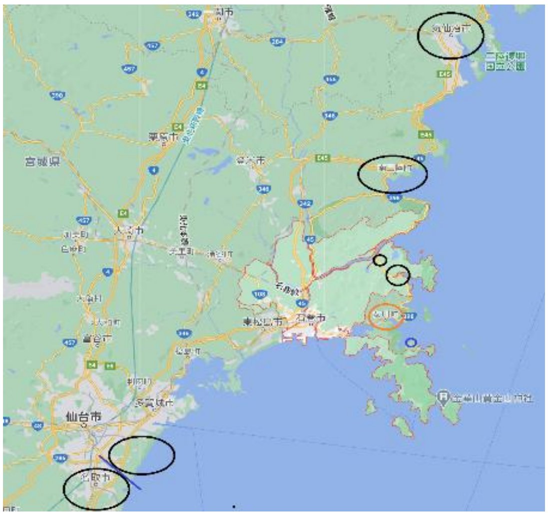
・1 月 29 日（金）

11:00～12:30　震災遺構　仙台市立荒浜小学校（小学校～周辺地域、職員案内有）

14:00～17:00　閖上震災を伝える会、名取市震災復興伝承館



③　視察の内容と学んだこと

ア　石巻市内

石巻市は広い市であり、被害状況は場所により様々であった。仙台市内から石巻市に向けての区間で、高速道路によって津波を食い止められたことが印象的であった。高速道路は固い物質でつくられているため、高速道路に逃げることが有効であることは覚えておきたい。石巻市内の中心部は震災後、産業復興が遅れている。内陸部に新しい家を建てた人が多いようで、内陸部へ居住地を移動している。逆に、内陸部は大型のショッピングモールや商業施設が建設され、震災前と震災後では町の様子が大きく変化している。

イ　女川町

女川町の特徴は漁業が盛んで原子力発電所があることで、伊方町に非常に似ている点が多い。女川町は海とともに生きていくために陸と海を遮るものを造らず、町全体をかさ上げし、減災の視点による「居住地の高台移転」を行っている。町の印象は漁師町ではなくヨーロッパ的な町並であった。このような町作りがなされた理由の一つに「還暦以上は口を出さず」、盾となり次の世代に町の将来を託していることが挙げられる。一度すべてが無くなった町を自分たちの力で取り戻そうとする若者たちの絆の強さが復興の推進力になったことは間違いない。震災前には、連携を全く取り合っていなかった団体同士であったが、今では、一つの青年部として様々なイベントを行っている。

今回、見学した町の中で最も、新たな町のビジョンが見え、活気にあふれていた。また、目指している町のテーマである「住み残る、住み戻る、住み来る」は三崎地域を含め過疎化が進むすべての地域の共通のテーマだと感じた。

ウ　雄勝町（石巻市）

居住区は高台移転を行っているが、今でも防潮堤の建設が続けられている。沿岸部では今まで住んでいた住民が戻ってこられるように建設が進められているが、長引くほど帰ってこられるかという心配もあった。また、道の駅も完成間近ではあるが、道の駅に入る商業施設は少ない。硯、瓦が有名ではあるが今後の需要を考えると、衰退することが予想されており、産業復興が厳しく町を元通りにできるか不安が残る。

エ　大川小学校

大川小学校は河口から約４ｋｍ離れていて、津波は来ないと思われていた。小学校の前には住宅地があり、北上川が流れていた。地震発生後、生徒たちはすぐ裏山に逃げることも容易にできる地形ながら、逃げるという判断がなされていなかった、大川小学校における最高裁の判決は 2019 年 10 月 10 日に発表された。内容をまとめると、一審では、教職員らは津波の７分ほど前に、学校近くで津波襲来の可能性や高台避難を市の広報車が訴えていたのに、高台に児童らを避難させる義務を怠ったと認定した。二審では、さらに踏み込んで事前対策の不備についても過失を認定し、校長らは児童の安全を確保するうえで「地域住民よりはるかに高いレベルの知識と経験が求められる」と指摘した。大川小は市の津波ハザードマップの予想浸水区域外だったが、高裁は「広大な流域面積を有する北上川の近くにあり、津波の襲来は十分に予見できた」と認定した。さらに、2010 年４月に改定した危機管理マニュアルに、具体的な津波からの避難場所として学校の裏山を指定し、避難方法などを決める必要があったのに、それを怠り、児童らが津波に巻き込まれたと結論づけた。石巻市の教育委員会も「マニュアルの是正を指導する義務を怠った」と指摘した。最高裁は 2019 年 10 月 10 日付で、市と県の上告を棄却する決定をし、遺族側の勝訴が確定した。

事前防災の過失、発生時の判断の責任の結果を学校関係者として重く受け止めなければならないと思う。学校保健安全法はすべての学校に「危機管理マニュアル」の作成をすでに義務づけている。今後は十分に確認して不備がないかを点検し、実効性を伴った対策がとれるよう定期的に見直すことや、地域との十分な連携や、保護者・地域への周知、マニュアルに基づいた訓練など、さらなる取組が必要になってくる。

オ　南三陸町

町が面している港付近はまだ再建がなされておらず工事が続いている。旧庁舎をそのまま遺した南三陸町震災復興記念公園では、震災時の津波の衝撃と公園内の緑の少なさに寂しい印象を受けた。隣接する特産品を中心にした商店街を出発点として、町を盛り上げてほしいと感じた。

カ　気仙沼市

・向洋高校跡

津波が来る前に学校から全校生徒が丘地を目指し避難し全員無事であった。学校の判断１つで助かる命も助からないという事実を実感することができた。

・気仙沼魚市場

日本トップクラスの水揚げ。多くの漁船が大きな影響を受けた。

・観洋ホテル

震災時津波の影響はなく、二次避難所となった。200 人を５月から 12 月まで受け入れ、避難所運営を住民の方々と一緒に続けていた。避難者の方からはまわりに気を使わず話したり、泣いたりできることが何よりも良かったようだ。

キ　仙台市荒浜小学校

10 万本もの防風林をなぎ倒して８ｍを超える津波がきた。沿岸部にあった集落はすべて流され、小学校に避難していた人は助かった。新築の体育館ではなく校舎の屋上に避難したことが功を奏した。訓練時より新たな試みをしたことが幸いであった。

助けを待つ際には、４つの町内会ごとに割り振られたそれぞれの教室においてお年寄

りの方々が子供たちの避難を優先してくれたため、非常にスムーズであった。

荒浜地区は災害危険区域となり、住民は希望地に移り住み誰も郷土には戻り住めていない。災害危険区域の土地の活用が今後の課題である。現在果樹園などの利用を進めている。

ク　閖上地区（名取市）

「閖上には津波は来ない、津波は貞山掘を超えない」といった言い伝えを信じてしまっていた。ゆえに、避難の遅れにつながり、多くの住民の命が犠牲となった。しかし後に、過去には大津波が来ていたことが分かった。過去から正しい知識を学びそれを後世に伝えていくことが重要であると感じた。

かさ上げした土地に復興住宅が建てられた。一階部分は吹き抜けで６階建ての住宅である。商店街も完成間近ではあるが、まだ町に戻っている人は少ない。震災後、10 年という時間が経過してしまっていること、仙台などで生計を立て始めた人が多い。

④　その他

ア　災害時の事前準備として校内に必要なもの

・飲料水　　・水（プール）　　・簡易トイレ（ポンチョタイプ）

・食料　　・発電機など

イ　現地の人の声

災害への準備も重要であるが、まずは高台に逃げること。避難の重要性を一番に伝えていた。生活物資の確保はつてなどをたどることになる。日頃からの信頼関係が大切である。

⑤　所感

東日本大震災発生から 10 年経ち、復興が進んでいると思い赴いた被災地であったが、女川町以外はどこも再建が進んでいないことが分かった。また、復興のための町づくりの考え方やスピード感が市や町によって様々であり、人が戻ってこないのではないかと感じることもあった。

教職員の立場からすると、学校跡も巡ったが生徒の命が助かったところもあれば、助からなかったところもあった。そういった現場を生で見ることができ、普段の訓練の重要性を改めて実感することができた。想定内のことが起これば命が助かるのではなく、想定外のことが起こっても命が助かるといった思考で行動すべきだと考える。また、三崎高校は避難場所として多くの住民が避難してきた後、避難所としての役割も果たさなければならない。対応によってはスラムのような場所になったところも存在する。地域住民のつながりがその後の復興の力になる。平時から協力して関係づくりを進めていくことも防災や減災につながると確信した。

また、今後想定される南海トラフ地震に未然に備えるためには、事前復興の視点からのまちづくりが重要である。10 年前の東日本大震災の教訓から学び、三崎地区で実行できそうなことについて考えていかなくてはならない。三崎高校が今年提案した「Ring Link プロジェクト」は改善を加えていけば、復興の観点から考えても一定の成果を上げられると感じた。しかし、地域としての防災意識の向上や災害発生時のマニュアル作りなど課題も多い。三崎高校生から地域の方々に防災についての知識の普及やネットワークの構築を図っていきたい。小さな町だからこそできる取組、少子高齢化が進む中での高校生に与

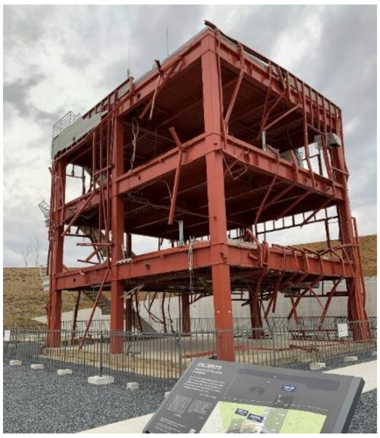
えられる役割は大きい。これからも多角的な視野を持ち、防災教育に取り組んでいきたい。

○女川町

○雄勝

○大川小学校

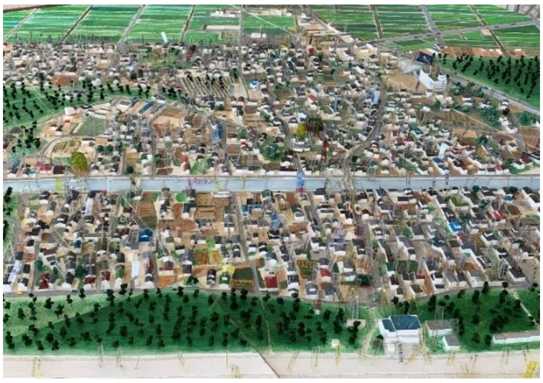
○南三陸町震災復興記念公園



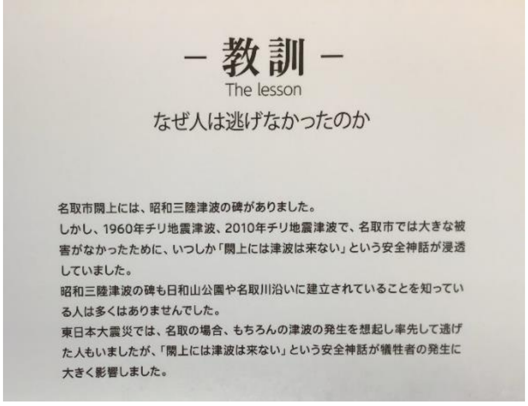
○旧気仙沼向洋高校

○気仙沼

○荒浜小学校



○名取



⑵　島根県立吉賀高等学校

①　視察の目的

「サクラマス・ドリーム・プログラム」の実施などを通して、キャリア教育の推進やＵターン人材の育成を進めている島根県立吉賀高校の取組について学ぶことで、本校の学習活動の一層の充実を図る。

②　視察の日程

２月 12 日（金）

10：00～11：00　吉賀高校訪問（学校紹介・意見交換）
11：00～11：30　サクラマス交流センター（寮）見学
11：30～12：00　吉賀高校見学
13：00～16：30　アントレプレナーシップ教育成果発表会

③　視察の内容と学んだこと

ア　吉賀高校

吉賀高校は、各学年１クラスの全校生徒 109 名の小規模校で、進路状況や公営塾があること、地域課題に取り組む姿勢など非常に本校と似た環境である。町全体が、保・小・中・高が連携して、町全体で「サクラマスプロジェクト（川で誕生した後、大きく成長し、やがて川に帰ってくる）」に取り組んでいる。吉賀高校はアントレプレーシップ教育を通して、吉賀町をフィールドとして、地域とコミュニケーションをとりながら、社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現する力を身につけていく。

意見交換の場で、特に印象に残ったのは、吉賀高校の地域との一体感である。「高校魅力化学びの体制構築会議」と題される会議には、教職員のほか保護者、町役場の職員、生徒代表が参加して、新たな学校づくりをどう進めればよいかについて話し合う。また、普段から町役場の人が職員室に出入りし、教職員と同じように魅力化コーディネーターが

常駐している。学校の外に出てみると、いたるところに吉賀高校のポスターが貼ってあり、吉賀高校応援自動販売機さえあった。教職員、町役場、保護者、近隣住民が、一体となり、町全体で子供を育てていくという姿勢を強く感じた。

イ　サクラマス交流センター（寮）

吉賀町が運営している町営の寮である。「自分の暮らしを自分で測る」、「みんなの暮らしをみんなで創る」をモットーにしており、自主性と協調性を育てている。男子と女子は別棟で生活し、それぞれの部屋はすべて個室である。ハウスマスターが常駐しており、常に生徒たちとコミュニケーションをとることができ、舎監室では、防犯カメラや放送設備、エアコンが管理できる設備が整っていた。食事は、調理員が朝食と夕食を作り栄養を管理している。教員だけでなく、地域のさまざまな立場の人たちが交流センターをサポートしているということが印象的であった。

ウ　アントレプレナーシップ教育研究発表会

吉賀高校のアントレプレーシップ教育とは、自分のやりたいことと興味のあること（Will）と地域の課題や必要性（Needs）を掛け合わせて、それぞれが考えたプロジェクトを実施していく中で、「未来を創る」力を身に着ける探究授業である。１年生（グループ探究）、２年生（個人探究）のそれぞれが、パワーポイントを使って研究の成果を発表した。

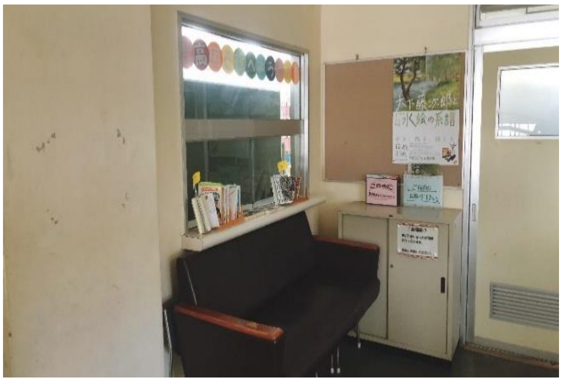
発表会の中で印象的だったのは、全員が高校生らしく自分たちの Will と地域の Needs を考えた上で、アクションを起こしていたことである。受け身にならず、自分たちでプランを立て、生き生きと発表していた。また、それぞれの発表をするだけではなく、ルーブリックを用いた評価や付箋紙にコメントを書いてフィードバックをする形が確立されていた。

④　所感

吉賀高校では、地域とのつながりの強さを感じた。町全体が育てたい子ども像を共有し、「学校と地域」という別個のものではなく、「地域の中の学校」であり、そこには、学校と地域の境界線がないように思えた。地域も積極的に教育活動に携わり、学校の運営をサポートしているため、教員がより教育活動に集中できる体制が整っている。

三崎高校では、教員が舎監業務や、地域との橋渡しになるなど、教員主体で生徒を育てている割合が多く、請け負う負担も少なくはない。確かにそれが教員全体が一枚岩となれる三崎高校の強みでもある。しかし、これから継続的により魅力的な高校を作っていくうえで、地域魅力化コーディネーターの導入や寮運営などにおいて、地域とより協働していくことも大切な視点だと考える。吉賀高校は、これからの三崎高校を考えていくうえでとても良いモデルとなった。

○吉賀高校



○サクラマス交流センター

○アントレプレーシップ教育成果報告会

○吉賀高校応援自動販売機

(3)　広島・愛媛視察

①　視察の目的

地域の自然や特産物、教育など地域資源を総合的に生かし、地域おこしに積極的に取り組んでいる大崎上島でのフィールドワークや大崎海星高校の視察を通して、地域の資源を複合的にとらえ最大限に生かす地域おこしの手法について学ぶとともに、新たな視点から自分たちの取り組みや地域を見直し、視野を広げる機会とする。

② 視察の日程

・２月 17 日（水）

09:45～15:00　大崎海星高等学校視察

15:00～17:00　大崎上島町視察

19:00～　　　憩の家宿泊（旧小学校を使った宿泊施設）

・２月 18 日（木）

11:30～14:00　きつねのぼたん視察

（今治北高校大三島分校の寮の晩御飯を提供している飲食店）

14:00～16:00　大三島視察

③ 視察の内容と学んだこと

ア　大崎上島町

大崎上島は「教育の島」を謳っており、高等学校は今回訪問した大崎海星高等学校の他に、広島商船高等専門学校と昨年度開校した県立広島叡智学園（中高一貫校）の計３校がある。叡智学園は進学校、広島商船高等専門学校は専門学校、大崎海星高等学校は地域に根差した教育を行う学校として、それぞれ位置づけが異なる。

イ　大崎海星高等学校

大崎海星高等学校は全校生徒 80 名程度の学校である。本校と同じく、地域に根差した教育を推進している。

教育課程 32 単位のうち、２単位を総合的な学習及び探究の時間に充てており、「大崎上島学」として授業を行っている。１年次は「羅針盤学」と名付け、島を知ったり、自己理解をしたりする授業を行っており、自分を理解し方向性を見つける羅針盤となる教育としてキャリア教育にもつながっている。２年次は「潮目学」と名付け、課題を教員側から与え、地域にアポイントを取って、課題を解決する授業を行っている。今年度は漁師・機械・トマト・郵便局の分野に分けてそれぞれ課題を与え、教員を１名ずつ配置して課題解決を行った。また、昨年度は観光案内所と連携し、地元民用・観光者用・移住者用に分けて観光ガイドを考えた。３年次は「航界学」と名付け、自分で地域課題を発見し、地域と協働しながら１年間かけて解決する授業を行っている。このとき、班員は１名のグループもあれば、多くても４名のグループまでとし、人数編成は生徒に任せている。年度末に模造紙に研究成果を書く。このとき、全ての班が「テーマ設定の理由」「最終目標」「成果と課題」「学んだこと」を書いており、総合的な学習及び探究の時間で培った学びや成長を振り返る機会を設けていた。「学んだこと」には「自分は今まで一人で何かを決めて行動することがなかったけど、自分で何かを決めてやり遂げる楽しさを学んだ。」など、

自分の成長に気が付く機会を設けていた。３年次に課題の発見に苦戦している生徒については、公営塾が開催している「夢☆ラボ」という課題発見・解決のための実践的な方法を学ぶイベントに参加することで、自らアイデアを見つけている。

大崎上島学では教員のみならず、コーディネーターや公営塾との連携が密に行われており、最近ではこの境界が薄くなっているという。連携を密に行うために重要なことはやはりミーティングである。大崎上島学のミーティングだけでなく、公営塾とのミーティングや地域おこし協力隊や寮とのミーティングなどを週１回ペースで行っている。なお、現在コーディネーターは２名所属しており、どちらもＵターン人材である。また、地域住民もＵターン人材が多く、地域の協力体制が整っている。今回の研修で、地域に根差した教育を行うためには地域住民の意識が大きく影響することが分かった。後記にもあるが、地域の協力体制が整っているからこそ、様々な活動ができる。県外視察を通して、三崎高校は地域の学校活動に対する理解や協力の体制がかなり整っていることを認識することができた。

大崎上島学の概要

	学問名	教育概要	身に付けさせたい力	配置人数		
				教員	ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ	公営塾
１年次	羅針盤学	キャリア教育	島を知る 自己理解	2	2	1
２年次	潮目学	課題を与えて地域とともに解決する	協働力 課題解決力	2	2	／
３年次	航界学	課題を発見して計画し、地域とともに解決する	協働力 課題発見力 課題解決力	2	2	／

大崎海星高等学校の活動の大きな成果物として「島の仕事図鑑」というものがある。これは、大崎上島で就労している人へ生徒が実際にインタビューをし、仕事の魅力などを発信する冊子である。現在第６弾まで発行されており、生徒はインタビューをすることで、コミュニケーション能力を培うだけでなく、島の仕事を理解するとともに、大崎上島学で地域の人と連携するときの資料として用いることができる。現在は島の仕事図鑑を作るだけでなく、どのように生かし教育的効果を見出すのかを検討中とのことで、成果物を作って終わりではなく、その先の活用まで考えているところに教育の最先端を感じる。

「みりょくゆうびん局」は正式な部活動として位置づけされており、現在 37 名が所属している。三崎高校のせんたん部のような外部に発信することを目的とした部活動であり、みりょくゆうびん局が地域みらい留学等の活動に参加している。みりょくゆうびん局は、始めは教員主導で活動を行っていたが、少しずつ生徒が主体的に活動するようになっているとのことである。今では大学での講義への参加や他学校との交流などを行い、生徒自らが自分の言葉で大崎上島の魅力を発信している。この活動でプレゼンテーション能力や発信力などを培っている。

大崎海星高等学校の訪問を通して、地域に根差した教育課程を制度化する方法、コーディネーターや地域、公営塾との連携を密に図り、教員の負担をある程度少なくする方法などを学んだ。

ウ　大崎上島町視察

島の仕事図鑑に載っていたパン屋を経営する地域の人にインタビューを行った。島の仕事図鑑に自分の写真が載ることに関して恥ずかしいと思いながらも、地域のため、学校のために協力することへの喜びを感じているようであった。

エ　憩の家

1985 年に閉校となった旧宗方小学校は木造の建物であり、1988 年ごろから宿舎として利用されていた。しかし、老朽化や雨漏りの問題から 2017 年に国の交付金制度を活用し、改修工事が行われた。現在は、小学校の雰囲気を残した宿舎兼、経営者の家族の住居として利用されている。

オ　きつねのぼたん

今治北高等学校大三島分校の寮の晩御飯を提供する飲食店の一つであり、本校でのまりーな亭に位置づけされる。夫婦で営業しており、奥様が旧大三島高等学校の OG である。大三島分校の寮は教職員住宅が近いということから舎監を設けていない。きつねのぼたんはハウスマスターのような業務もしており、何か問題があった場合は、生徒がきつねのぼたんに連絡するようになっている。晩御飯はきつねのぼたんを始めとした六つの飲食店や旅館、家庭などが日替わりで担当していて、生徒が飲食店等に訪れて食事をしている。このように飲食店で食べることで、食べ物を簡単に残すということができないようにする効果があると思う。現在の三崎高校の寮では好き嫌いや間食が原因で簡単に晩御飯を残す生徒もいる。何か対策を打たないといけないと感じた。

きつねのぼたんは、大三島分校生との地域活性化に関するミーティングイベントなども行っており、大三島分校との連携が深い。このミーティングイベントのねらいは、地域の人に大三島分校のことを知ってもらうことである。この取組について話を聞かせてもらい、高校生が地域のイベント等に積極的に参加して、高校の魅力を伝えていく重要性を改めて感じた。

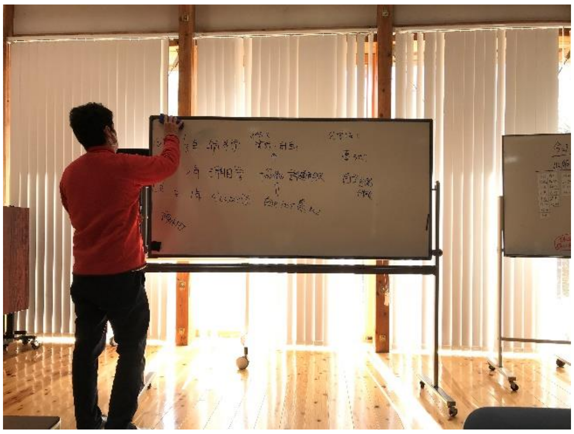
カ　大三島視察

大三島分校のある大三島の西側は昔の景観を残しながら観光業を盛り上げようとしている。一方、大三島の東側は観光客数増加のためにゼロベースで様々な商業施設や宿泊施設が建設されている。大三島の中でも場所によって戦略に相違点があると感じた。

④　所感

地域に根差した教育を行うために、地域の協力が不可欠であることを学んだ。三崎の地域は本校の活動に協力的である。この事実は当たり前のことではない。感謝したい。また、今後も持続的な取組を行っていくためには、地域魅力化の活動をするための形づくりをしていかなければならないと感じた。具体的には、大崎海星高等学校のように、教員や地域、公営塾、コーディネーターと連携を密にして、特定のマンパワーのみで地域魅力化活動が行われないような制度を構築していきたい。今回の視察研修を通して、改めて、本校の置かれている環境の素晴らしさと、教職員の情熱の強さを改めて感じることができた。

○大崎海星高等学校



○大三島憩の家

５　成果発表会（未咲輝 - SENTAN - 発表会）

(1)　期日

令和３年２月 16 日（火）

(2)　実施内容

13：20～13：30　開会式

13：40～15：10　成果報告会

15：20～16：20　講演会

16：20～16：30　閉会式

(3)　概要

６つの研究班が、１年間取り組んできた探究活動について、研究内容及び得られた成果等について発表する。司会・進行はせんたん部の生徒が担当する。

(4)　その他

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、来場者の人数を制限するとともに、本校 Facebook でのオンライン配信を行った。また、ウェブ上での感想記入用フォームを作成した。

(5)　詳細

①　情報・防災班

情報・防災班は、主に「防災アプリ」の開発を目指して活動を行った。校内の使用機器では開発が困難であったため、防災意識啓発 RPG の開発に変更し、作成を進めている。今後はゲームの完成とオリジナル防災ブックの完成を目指して活動を行っていく。また、今年度初めて実施した地域連携避難訓練も引き続き実施していく予定である。

②　アート班

アート班は、三崎地区の防潮堤へのアート作品の制作を主な活動として取り組んだ。新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントの実施が難しかったが、来年度もより多くの人に楽しんでもらえるイベントを企画し、防潮堤アートを完成させる予定である。また、３年生が中心となって取り組んでいた漂着物を利用したベンチ作りも継続して行っていきたい。

③　商品開発班

商品開発班は、他の研究班の活動と協働してサシェ作りのワークショップの実施や「みそボール」開発、カフェメニューの開発などを行うことができた。また、独自の取組として燻製作りや冷凍海鮮鍋づくりにも取り組んでいる。来年度は、これらの商品を実際に販売することができるよう、研究を進めていく予定である。また、開発した商品を使って外部のイベントやコンテストなどにも積極的に参加していきたい。

④　ツアー班

ツアー班は、高校生目線のガイドブックの作成を目指して活動に取り組んだ。本年度は、観光拠点施設「はなはな」や地元の商店を中心にインタビューを行った。また、本年度は「はなはな」の飲食店の食レポ動画や、八幡浜市の道の駅「みなっと」から「はなはな」までのサイクリング動画の制作などを行い、地域の魅力を発信してきた。これらの活動を基にガイドブックを作成し、来年度は実際にツアーを企画する予定である。

⑤　カフェ班

カフェ班は、地元レストランの「まりーな亭」と連携して、高校生カフェ「みさこう Café」をオープンした。商品開発班と協働しながら、地元の海水から塩を精製し、その塩を使った基本メニューを作り上げた。その後も１年生の開発したヤマモモジャムを使った商品など、毎月新メニューを提供している。来年度は、新型コロナウイルス感染症の予防を徹底しながら、一人一人の技術を向上させ、より良いカフェを目指したい。

⑥　イベント班

イベント班は、主に「みさこうたいそう115」の普及を行ってきた。地域のイベントが新型コロナウイルス感染症の影響により中止になる中で、オンラインイベントに参加したり、校内行事でこれまで以上に積極的に体操を行ったりするなど新しい取り組みにも挑戦した。接触のない新しい振り付けも考えたので、来年度は多くのイベントで「みさこうたいそう115」を普及していきたい。また、本年度も行った愛媛大学ダンス部とのコラボダンスの取組も継続して行っていきたい。